

# 医療者を対象とした意思決定支援に関する教育プログラムの効果

○山村麻予 (関西福祉科学大学)  
小川朝生 # (国立がん研究センター東病院)

平井 啓 # (大阪大学大学院)  
鈴木那納実 # (大阪大学大学院)

キーワード：意思決定支援，医療，効力感

## 問題と目的

現在，わが国において医療分野における「意思決定支援」は喫緊の課題である。たとえば，治療方針を決めたり，新しい治療を始めたりする場面において，意思決定ができない患者をどのようにサポートするのか，いくつかのガイドラインが出されているものの，医療現場ではその困難さが指摘されている。このような困難の背景には，医療従事者側の意思決定支援に対する理解が不十分であり，具体的な意思決定支援の方略が浸透していないことが挙げられる。また，チーム医療が求められる昨今，アセスメントの視点がそれぞれの専門性に帰属してしまうこともあげられる。

そこで本研究では，法令やガイドラインといった知識面と，具体的方略といったスキル面の両面から，医療者に対する意思決定支援に関する教育プログラムの作成を行い，医療場面の意思決定支援の充実に貢献することを目指した。

## 方 法

**調査協力者** 医療者 88 名。そのうち，質問紙回答者 77 名 (看護師 44 名，医師 22 名，その他)。

**研修内容** スライドを使用した講義と演習 (個人・グループ) から構成し，約 4 時間の研修プログラムとして実施した。第一部として，意思決定支援に関する制度や倫理，枠組みに関する事項を，第二部として，患者と接する際の具体的な理論やスキルに関する内容とした。

**効果評定** 研修の前後にアンケートを実施し，前後比較で研修効果を検証した。なお，質問紙にはランダムに ID 番号を付し，事前事後データの参照に使用した。

**アンケート項目** アンケートはフェイスシートと (1) 知識，(2) 効力感，(3) 診療行動の有無，(4) 自由記述，(5) 意思決定支援構成要素の 5 つのパートから構成された。このうち，2 時点で測定する (1) と (2)，質的変数である (3) を報告する。(1) については，誤った知識 10 項目を示し，4 件法で回答を求めた。(2) は 15 項目，4 件法。

## 結 果

**対象** 研修参加者のうち，研修前後の両地点でアンケートに回答のあった 74 名 (男性 20 名，女性 54 名，平均年齢 40.0 歳) を分析対象とした。

**知識と効力感の変化** 研修前後で対応のある  $t$  検定を行ったところ，知識と効力感のいずれにおいても平均値に有意な差が認められた (順に， $t=3.97$ ， $p<.001$ ， $t=6.89$ ， $p<.001$ ) (Figure 1, Figure 2)。なお，知識は誤信を問う項目であるため，得点の減少が知識の向上を意味している。

**研修参加者の内省** 自由記述で得られた記述データを意味の分かる文章単位に分け，内容分析を行ったところ，「学び・気づき」，「振り返り」，「これからの意気込み」，「セミナー自体への感想」の 4 カテゴリーが抽出され，その下位カテゴリーとして 17 の中カテゴリーが構成された。

## 考 察

**知識と効力感の変化** 研修前後において，有意な差がみられたことから，プログラムの教育効果が一定程度確認されたといえる。項目単位の検討を詳細に行ったところ，特に，患者の持つ認識や理解を確認すること，治療全体の目標を確認してから実施に移ること，生活価値観を重視する必要性に関しては，研修参加者に有用性が認知されたと考えられる。一方で，知識項目については，事前測定時点で正しい理解がなされている項目も一部見られたため，今後の研修内容に反映させる必要がある。効力感も全体としては向上したものの，困難さは依然として残る部分もみられた。

**研修参加者の内省** 自由記述では，ポジティブな意見が目立った。とくに，ガイドラインや法制度といった知識面についての学びの場となったこと，またアセスメントの視点として「生活価値観」を取り入れる必要性の気づきが挙げられた。

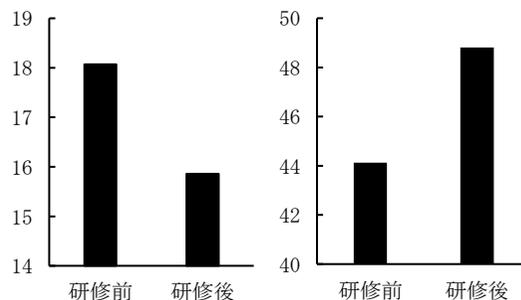


Figure 1 知識の変化

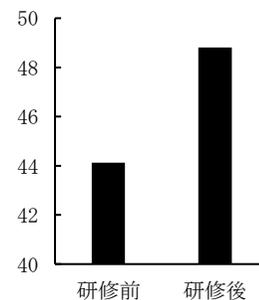


Figure 2 効力感の変化